

中央区まちづくりワークショップ  
報告書

令和5年(2023年)1月

## 1. 概要

### (1) 目的

熊本市中央区では、平成 25 年に区のまちづくりの方針を示した「中央区まちづくりビジョン」を策定し、区民と協働でまちづくりを進めてきた。このワークショップは、地域における様々な分野で活動する方々や将来のまちづくりを担っていく学生などを交え、地域の実情や課題そしてこれからの展望などについて話し合い、今後のまちづくりを考えるヒントを見つけるために実施した。

### (2) 実施日・会場・テーマ

	日時	会場	テーマ
第 1 回	令和 4 年 11 月 29 日 (火) 14:00~16:00	中央公民館 6 階	地域の防犯・防災について
第 2 回	令和 4 年 12 月 1 日 (木) 14:00~16:00	ウエルパルクまもと 1 階 あいぽーと	地域での子育てについて
第 3 回	令和 4 年 12 月 5 日 (月) 14:00~16:00	ウエルパルクまもと 1 階 あいぽーと	健康・福祉について
第 4 回	令和 4 年 12 月 8 日 (木) 14:00~16:00	中央公民館 6 階	賑わいや地域振興について
第 5 回	令和 4 年 12 月 13 日 (火) 14:00~16:00	中央公民館 6 階	地域の魅力やつながりについて

※第 5 回 当初予定テーマ「地域の文化やつながりについて」より変更

### (3) 参加者及び募集方法

#### ①参加者

中央区内各地域団体、中央区内居住者及び通勤通学者（一般参加）、熊本市職員  
延べ 133 名（内訳：第 1 回 25 名、第 2 回 25 名、第 3 回 24 名、第 4 回 30 名、第 5 回 29 名）

#### ②一般参加者募集方法

市政だより、チラシ配布及び熊本市公式 LINE などによる告知。参加希望者は、電話またはインターネットによる申し込みを行った。

### (4) 実施方法

参加者を複数のグループに分け、グループワークで意見を出し合った。

## 2. 内容要旨

各回テーマに沿ってディスカッションを行い、そこで出された「現状」「課題」「目標」に関する意見をもとに、要旨をまとめたものである。

**第1回：令和4年11月29日（火） 14：00～16：00**

**テーマ：地域の防犯・防災について**

### （1）現状

現在、それぞれの地域で防犯に対する取り組みがなされており、地域団体と校区小中学校、警察などが連携して実施する防犯パトロールは認知度も高く、犯罪抑止につながっている。

また、熊本地震の影響もあり、各地域で自主防災クラブが結成され避難訓練などが実施されるなど、地域防災に対する意識が高い。

中央区には繁華街・観光地・企業・各種教育機関などがあり、時間帯によっては住民でない者が多く滞在している。そのような状況から、熊本地震の際には、避難所に多くの「地域外」の避難者が詰めかけた。自治会等が避難所運営をするなかで、地域住民ではない者への対応に困難を感じたという地域もあった。特に、繁華街に近い地域や、区境にある地域では、運営調整が難しかったという声が聞かれた。

### （2）課題

防犯パトロールについて、曜日や時間帯が固定されており、形骸化しているとの指摘があった。対象としている年齢（小中学生）が見られない夕刻の時間帯に行われることが多く、保護者の参加が少ないことも課題となっている。さらに、自転車運転時のヘルメット着用や通行場所（左側通行等）の交通ルール違反も多くみられるという。

また繁華街については、アーケード街での客引き行為や、酔客への対応をする必要もあるが、繁華街に交番がないことが問題である。

さらに、区内には大規模マンションが多く立地しているが、マンション自治会（管理組合等）で防災対応をする傾向にあり、地域自治会の活動との連携ができていないケースがある。また、学生など若年者単身世帯の無関心や、高齢者など避難行動要支援者への対応、留学生・旅行者などへの多言語対応が懸念される。

### （3）これからのまちづくりに望むもの

「防犯・防災」を軸としたまちづくりには、交番や防犯カメラ・街灯の設置、防災倉庫の設置などハード面の整備を進めるとともに、人と人とのつながりを大事にすることが重要

となる。

前述の通り、中央区には大学や専門学校、大手企業の支店などがある関係上、若者の単身世帯の割合が高く、家族世帯であっても比較的若い年齢層が多い。そのようななかで、若い世代が参加しやすい活動を行うことは、地域力の底上げになると考えられる。平時から交流をもつことで、自分の住む場所がどのような地域でどのような住民がいるのかを知ることができ、有事のスムーズな対応につながる。また、情報伝達・共有の手段として SNS を活用することで、幅広い世代へのアプローチが可能になる。

犯罪や災害は、特定の地域だけの問題ではないため、近隣の地域が連携を図り、協力しあいながら体制づくりをすることも、効果的な対策になると考える。

#### (4) 参加者の主な意見

<b>現 状</b>
(取り組み) <ul style="list-style-type: none"><li>・ 定期的な防犯パトロールや見守りが実施されており、犯罪の抑止力となっている</li><li>・ 自主防災クラブ及び避難所運営委員会等を結成し、災害に備えている</li></ul>
<b>課 題</b>
(防犯) <ul style="list-style-type: none"><li>・ 自転車運転時のヘルメット着用や左側通行などのルールが守られていない</li><li>・ 防犯パトロールの形骸化</li><li>・ 防犯マップの認知不足</li><li>・ 繁華街での客引きや酔客などへの対応</li></ul> (防災) <ul style="list-style-type: none"><li>・ 自主防災クラブや避難所運営委員の構成（メンバー集めに苦慮している）</li><li>・ 地域外からの避難者対応</li><li>・ 避難所運営時の人手不足</li><li>・ マンション自治会（管理組合等）と町内自治会との在り方</li><li>・ 単身者や若年世代の無関心</li><li>・ 高齢者など避難行動要支援者への対応</li><li>・ 留学生や旅行者などへの多言語対応</li></ul>
<b>これからのまちづくりに望むもの</b>
<ul style="list-style-type: none"><li>・ 防犯パトロールや防犯マップなど、既存の取り組みの周知</li><li>・ 防犯パトロール実施時間帯等の見直し</li><li>・ 犯罪抑止のため、防犯カメラや街灯の新設</li></ul>

- 地域住民と交番（警察）との関係強化
- 平時からの地域交流による、人と人とのつながりづくり
- 若い世代が自主的にかかわりたくなる地域づくり
- 町内の垣根を超えた組織づくりと運用
- 情報伝達媒体としての SNS 活用

【ワークショップの様様】

令和4年11月29日 参加者25名



**第2回：令和4年12月1日（木） 14：00～16：00**

**テーマ：地域での子育てについて**

### （1）現状

地域での子育てについてディスカッションするにあたり、まず参加者それぞれが考える『子ども』の定義を話し合った。それぞれの立場によって、定義（対象者）が異なっていることが分かった。

『子ども』を対象とした具体的な取組みとして、子育てサークルや自治会での出産祝い金贈呈などの「乳幼児と保護者を対象とした事業」と、見守りパトロールや夏祭り、サマーキャンプなどの「主に小学生を対象とした事業」が実施されている地域がある一方で、子どもが少ない地域では、そのような取組みをしていないケースもあった。

### （2）課題

子育てを地域で支援する仕組みとして、民生委員・児童委員、主任児童委員、PTAなどがあるが、共通する課題として「担い手不足」がある。

民生委員・児童委員については、退職年齢が75歳であることにより、長期在任が可能である一方で、人の入れ替わりが少ないことで次世代育成が困難になっている。

また、子どもたちの教育環境を支援する保護者団体であるPTAでは、行事への参加者が少ないことや、役員のみ手がいないという問題がある。さらに近年では、PTAに非加入の世帯もあることから、在り方を問われる状況になってきている。

PTAや子ども会といった保護者の団体は、校区や自治会との連携があり、子育て世帯が地域と交流を図る窓口となっているため、参加者の減少は地域での子育て支援に影響を及ぼす可能性が高い。

### （3）これからのまちづくりに望むもの

地域での子育て支援は、保護者の視点、子どもの視点、地域住民の視点、それぞれから考えることが必要であると考えます。

保護者と地域との関わりが少ない「乳幼児」の時期、保護者も子どもも地域（校区）との関わりが大きくなる「小・中学生」の時期、保護者だけでなく本人へのアプローチが必要となる「高校生」の時期。それぞれの時期に合わせた子育て支援を行うことで、子育てしやすい地域となることが期待できる。

従来通りの組織・事業にこだわらず、参加しやすい・参加したくなるような地域行事の実施、SNSやオンラインを利用した情報発信など、時代に即したものに変わっていくことで、子育てをする若い世代が地域とつながりやすくなり、その結果、子育てしやすい環境を作り、子育て世帯の流出減にもつながると考える。

#### (4) 参加者の主な意見

<b>現 状</b>
<p>(子どもの定義)</p> <ul style="list-style-type: none"><li>・立場により『子ども』と定義する対象者年齢が異なる</li><li>・町内や子ども会など、自治会で主にかかわるのは『小学生』</li><li>・校区単位で考えた場合には『小学生及び中学生』</li><li>・民生委員の立場で考えた場合には『乳児から高校生まで』</li></ul> <p>(取り組み)</p> <ul style="list-style-type: none"><li>・自治会からの出産祝い金贈呈</li><li>・子育てサークル</li><li>・見守りパトロール</li><li>・夏祭り、サマーキャンプなどのイベント</li><li>・なにもしていない</li></ul>
<b>課 題</b>
<ul style="list-style-type: none"><li>・民生委員・児童委員の後継者不足：<ul style="list-style-type: none"><li>75歳で退職をしなければならないことが問題</li><li>75歳まで永年努めている人がいることによる次世代育成困難</li></ul></li><li>・長期在任者の影響力が大きく変革が難しい</li><li>・子ども会の非会員が多く、自治会にも参加しない人が増えた</li><li>・PTAに参加しない保護者の増加</li><li>・自治会、PTAに共通する問題として、保護者が非会員であっても子どもの扱いに差をつけることがためられる</li><li>・地域イベントへの参加率の低迷</li><li>・コロナ禍で実施できなかったイベントの消滅</li><li>・子ども自身が塾や習い事などにより多忙で、地域イベントへの参加ができない状況にある</li><li>・子ども食堂を設置しても、本来の対象である生活困窮者に来てもらえない</li><li>・地域の子どもへの声掛けをすると、不審者のような扱いをされるケースがある</li><li>・出生数と比べ、児童数が少ない。入学前に転出するケースがみられる</li></ul>
<b>これからのまちづくりに望むもの</b>
<ul style="list-style-type: none"><li>・餅つきなど、家庭では体験できないような地域イベント実施による、参加者の呼び込み</li><li>・地域イベントを通じた連帯感の醸成</li><li>・子育てをしながら住み続けたいまちづくり</li></ul>

- 子育て当事者、地域住民双方が「地域の子ども」との認識を持つ
- 赤ちゃん訪問とあわせ、保護者へのケアの実施
- 共働き世帯が地域に関わるきっかけとしての、保育園と地域とのつながりづくり
- 世代を超えた交流ができる場づくり
- 防犯対策として、平時からの地域交流による住民同士のつながりづくり
- 情報のデジタル化で、必要な情報をいつでも入手できる状況にする
- SNS やオンラインを活用した子育て支援

【ワークショップの様様】

令和4年12月1日 参加者25名



**第3回：令和4年12月5日（月） 14：00～16：00**

**テーマ：健康・福祉について**

### （1）現状

各地域では、ラジオ体操や健康体操などのサークル活動、交流事業、8020運動など、健康・福祉に関する事業が実施されてきたが、コロナ禍の影響で、縮小や中止を余儀なくされたものも多い。コロナ禍で健康に対する意識が以前にも増しているものの、コロナ禍前とは事業のスタイルを変えざるを得ない状況となっている。

地域での健康・福祉／福祉支援事業については、自治会が要となり、健康を目的としたラジオ体操や健康体操などのサークル活動が行われているが、役員が高齢化している現状があり、後継者となる若い世代の参加が少ない傾向にある。

### （2）課題

健康・福祉についての取組みに限らず、地域活動全般について、若い世代の参画が進まない原因として「地域活動に魅力を感じない」という声がある一方、活動についての情報周知ができておらず「そもそも知らない」から参加できないという課題がある。また、経済的・時間的余裕がないということも、一因と考えられる。

さらに、高齢者単身世帯の増加や、マンションなど集合住宅の増加により、地域との関係の希薄化も進展しており、総じてマンパワー不足につながっている。

### （3）これからのまちづくりに望むもの

地域でできる健康・福祉への活動は、身体健康だけでなく、心身の健康にもつながり、地域の健康サークルで身体を動かすだけではなく、そこで行われる会話や人とのコミュニケーションが、安心感や楽しみになっている現状がある。従来の活動に加え、e-スポーツなど新たな取り組みをすることで、幅広い参加者が期待できる。

また、高齢者が活動に参加しやすいよう、サークル活動自体の充実と併せて、安心して免許返納できるような公共交通機関の充実も重要である。

また、事業への参加を促すべく、必要な情報を正しく届けるため、情報発信方法も考えなければならない。インターネットの使用が難しい人もいるため、従来の紙媒体を残しながら、同時にSNSやオンラインを活用した情報発信・共有をすることで、広く情報が届けられると考える。

#### (4) 参加者の主な意見

##### 現 状

- ・ 8020 運動などの歯科衛生に関する活動
- ・ ラジオ体操、健康体操、太極拳などのサークル活動
- ・ 子ども会と老人会との交流事業
- ・ 地域見守り活動
- ・ コロナ禍で健康に対する意識向上（メディア等の情報に対し敏感になっている）

##### 課 題

- ・ 情報発信不足（発信しているが見てもらえない現状）
- ・ 自治会長の世代交代が進まない
- ・ サークル活動等の担い手不足
- ・ 社会福祉支援事業へのマンパワー不足
- ・ 高齢単身世帯の増加
- ・ 保護者世代が経済・時間に余裕がない
- ・ 地域住民同士の関係の希薄化
- ・ 支援が必要な人に情報が届いていない
- ・ 高齢者の運転と免許返納の問題
- ・ 身体健康と、心身の健康

##### これからのまちづくりに望むもの

- ・ SNS を利用した、情報発信及び共有
- ・ デジタル化による健康に対する意識向上
- ・ 高齢者向け e-スポーツなど、新たな取り組みの実施
- ・ 公共交通機関の充実による、高齢者の運転免許返納問題の解消
- ・ 相談機関同士の連携強化
- ・ 住民同士の交流の場の増加

【ワークショップの様様】

令和4年12月5日 参加者24名



**第4回：令和4年12月8日（木） 14：00～16：00**

**テーマ：賑わいや地域振興について**

### （1）現状

中心市街地などの「まち」と、校区や町内などの「身近な地域」と、大きく2つの観点からの意見が出された。これは、中心市街地をもつ中央区の特徴である。

コロナ禍で厳しい状況にあるとはいえ、この10年を振り返ると、九州新幹線開通、サクラマチクマモトやアミュプラザくまもとの開業など、民間による開発事業が多数行われており、ホテルの新規開業も相次いでいる。

中心市街地などでは、ゆかた祭りやハロウィン、クリスマスマーケットなどのイベントが多数開催され、若者を中心とした賑わいがみられる。また、地域資源を活用した「白川夜市」、「水前寺にぎわい祭り」といったイベントの開催や、「藤崎宮秋の例大祭」といった歴史ある催しなどもある。「火の国まつり」は、官民が連携して開催する夏の風物となっている。

校区や自治会のような地域単位では、運動会や夏祭り、どんどやなど、地域住民交流の場となるイベントのほか、廃品回収、公園清掃などの地域活動も行われている。

### （2）課題

近年、平時（イベント等の開催がない時期）の中心市街地は、20・30年前と比べて賑わいがみられず、とりわけ若者の『「まち」離れ』が顕著である。平時の集客力不足や、イベント時の混雑や交通アクセスが課題である。

また、イベントに対する世代間の温度差、ターゲット層の偏りも感じられる。地域単位のイベントでは、運営者・参加者ともに、メンバーの高齢化や固定化が問題となっている。事業をするにあたり、予算の問題や、騒音など近隣住民の理解を得ることの難しさなどもあるほか、コロナ禍で縮小や中止としたイベントを今後どのように継続するかということについても問題を抱えている。

### （3）これからのまちづくりに望むもの

賑わいを取り戻すためには、まずもって住みやすい地域であることが重要だと考える。子育てがしやすいまち、高齢者が安心して暮らせるまちであれば、人が定着し、さらに若者が出店や起業をしやすい土壌があれば、若者の流出が抑えられる。そのような環境を整えることで人が増え、幅広い世代が集いつながる地域となり、賑わいを生むと考えられる。

イベントについては、一部の層や観光客だけが盛り上がるのではなく、地域も一緒になって盛り上がるができる事業が望まれる。

中央区には繁華街や、熊本城、水前寺成趣園などの観光資源が多数ある。交通アクセスの整備やSNSなども活用した情報発信のうえでイベントを開催することで、地域も参加者も盛り上がり期待できる。

#### (4) 参加者の主な意見

<b>現 状</b>
<p>(広域)</p> <ul style="list-style-type: none"><li>・九州新幹線開通やアミュプラザくまもと、サクラマチクマモト、屋台村など民間による開発事業</li><li>・火の国祭りなど官民連携で行うイベント</li><li>・ゆかた祭り、银杏祭、城下町肥後のひな祭りなど中心市街地でのイベント</li><li>・藤崎宮秋の例大祭、本妙寺頓写会など歴史あるイベント</li><li>・白川夜市、水前寺にぎわいまつり、みずあかりなど「熊本の資源」を活用したイベント</li><li>・くまフェス、クリスマスマーケット、ハロウィンなどの新たなイベント</li></ul> <p>(町内会等)</p> <ul style="list-style-type: none"><li>・校区運動会、夏祭り、もちつき、どんどや、花見などの地域でのイベント</li><li>・廃品回収、公園清掃、植栽などの地域活動</li></ul>
<b>課 題</b>
<p>(広域)</p> <ul style="list-style-type: none"><li>・若者のまち（中心市街地）離れ</li><li>・観光客向け事業が多く、地域住民が盛り上がらない</li><li>・情報発信不足、周知方法の問題</li><li>・会場への交通アクセス</li><li>・イベントに対する世代間の温度差</li><li>・コロナ禍で縮小や中止となったイベントの今後</li></ul> <p>(町内会等)</p> <ul style="list-style-type: none"><li>・スタッフ（役員）の担い手不足</li><li>・参加者減少と高齢化</li><li>・会場近隣住民の理解</li><li>・予算不足</li><li>・事業の多様化による継承困難</li><li>・コロナ禍で縮小や中止となったイベントの今後</li></ul>
<b>これからのまちづくりに望むもの</b>
<ul style="list-style-type: none"><li>・参加しやすいイベント</li><li>・SNSなどを活用した情報発信</li><li>・民間と行政との協働</li></ul>

- ・若者の出店、起業がしやすい環境づくり
- ・歴史と文化、伝統を活用し、観光資源とする
- ・幅広い世代が賑わいを感じることができる
- ・若者の定着
- ・子育てがしやすいまちづくり
- ・高齢者が安心して暮らせるまちづくり
- ・愛着を持つことができるまちづくり

【ワークショップの様子】

令和4年12月8日 参加者30名



**第5回：令和4年12月13日（火） 14：00～16：00**

**テーマ：地域の魅力やつながりについて**

### （1）現状

参加者が感じている中央区の魅力として出た意見は、大きく3つに分けられた。

1つ目は、自然と都市の融合。都市部にあっても、立田山自然公園、高橋公園緑地、白川河川敷をなど、自然が多くみられることが大きな魅力である。昨年開催された「全国都市緑化くまもとフェア（くまもと花博）」は、地域住民だけでなく訪れる人にも魅力を認識してもらったきっかけとなった。また、水（水道水）のおいしさも魅力である。

2つ目は、歴史的建造物と街並み。寺社仏閣といった歴史的建造物や、夏目漱石・小泉八雲等にまつわる史跡などが多く存在する。また、城下町として栄えた地区には古い街並みが残り、最近ではそれを活かしたまちづくりや、古民家をリノベーションした店舗の出店などがなされている。

3つめは、将来性。T SMCをはじめとした企業の熊本（菊陽町）進出により、今後近隣市町村での人口増加が見込まれる。それに伴い、街に活気が生まれることが予想される。

### （2）課題

前述のような「魅力ある資源（要素）」があるにも関わらず、魅力の発信ができていないことは課題である。どんなに魅力があったとしても、それを知ることができなければ、守り続けることも、人を集めることも困難である。地域のなかでは知られているが、それを発信していない（できていない）ケースが多くみられる。

また、チラシやポスターなどでの告知を行っている事業が多いが、キャッチフレーズが抽象的でわかりづらいというケースもあった。情報発信の手段として、紙媒体が利用されている場合には、周知できる範囲に限界があり、広範な周知が難しい現状がある。

そして、自家用車での移動が多い熊本では、道路渋滞の問題も顕著である。J Rや市電もあるが、区民にとっての公共交通機関はバスが主である可能性が高い。しかしながら、バス路線も充実しているとは言い難い状況である。

暮らす人にとっての魅力を考えて場合、行政の施策も重要となる。福祉や子育て支援が充実している近隣市町村への人の流出がある事実は、近隣市町村の方が「子育てをするにあたって魅力がある」と認識されていると考えられる。

### （3）これからのまちづくりに望むもの

中央区には多くの魅力的な文化・歴史・イベントがある。地域を訪れる人に向けて、その魅力を知ってもらうために、既存の紙媒体と併せて、SNSを活用した発信をしてはどうか。SNSに不慣れな高齢者には、若者が高齢者に使い方を教える場を設けることで、SNSの活用だけではなく、世代間交流にもつながると考える。

また、それぞれの地域の魅力を個々に発信するだけではなく、中央区全体で魅力をリスト化することで、史跡や歴史を守ることにつながるのではないかと。

また、暮らす人にとって魅力的な地域であるよう、「暮らしやすいまち」にすることも重要である。子育てがしやすい、高齢者が安心して暮らせる地域が「魅力的なまち」だと考える。

#### (4) 参加者の主な意見

現 状
<p>(地域の魅力とは)</p> <ul style="list-style-type: none"><li>・わくわくするもの</li><li>・参加したい、関わりたくなるもの</li><li>・ほかの人に紹介したくなるもの</li><li>・驚きや期待値があるもの</li><li>・記録に残したいと思うもの</li><li>・再訪したいと思う場所</li><li>・安心安全に生活ができること</li><li>・子育てがしやすいこと</li></ul> <p>(具体的な地域の魅力)</p> <ul style="list-style-type: none"><li>・「都市」と「自然」が調和したまち</li><li>・水（水道水）がおいしい</li><li>・自然が多い</li><li>・歴史的建造物の現存数</li><li>・子飼商店街。人と人とのコミュニケーションが残る魅力的な「商店街」</li><li>・古い街並みの活用と古民家を活用した店舗</li><li>・加藤清正の時代から残る「地名」や「町割り」</li><li>・T SMC等の企業進出による将来性</li></ul>
課 題
<ul style="list-style-type: none"><li>・まちづくり団体の後継者不足</li><li>・交通渋滞</li><li>・情報が広く周知されていない。認知度不足</li><li>・キャッチフレーズが抽象的でわかりづらい</li><li>・若者世代に向けた施策</li><li>・SNSの活用が高齢者にはわかりづらい</li><li>・小さな「地域の商店」が減少したことにより、高齢者が買い物をする場所が近隣にない</li></ul>

- ・近隣市町村と比較して、行政からのサポートが手薄

#### これからのまちづくりに望むもの

- ・バス路線の見直し。公共交通機関の充実
- ・地域の名所となる歴史的建造物（寺院等）と町並みの保存
- ・歴史的建造物や名所などのリスト化
- ・人が集まりやすい施設を作る
- ・子供向けイベントを開催することで、保護者世代へのアプローチ
- ・既存の発信ツールの認知度アップ（活用）
- ・回覧板を見てもらえるような工夫
- ・SNS の活用だけでなく紙媒体も併用した情報発信
- ・高齢者向け SNS 講座。若者が高齢者にスマホの使い方を教える場
- ・ワークショップなどを活用した、人と人とのつながりづくり

【ワークショップの様様】令和4年12月13日 参加者29名

